

一らしやの合羽著し申間敷事、

二月

合羽製作

〔雍州府志土産〕合羽略中 自柳馬場二條至四條家々製之其造之法以糊綴紙後傳桐油數遍天晴則

毎日北方自荒神河原南至五條河原乾之而無隙地其製造之多也可推而知之也又有以絹製之者

〔和漢三才圖會二十八〕襖あはせ製雨衣 阿末古呂毛 此云合羽 字義未詳

按雨衣即合羽也用羅紗羅世板襪褐之類更佳朝鮮油布次之

〔萬金產業袋五〕寸尺并字類略中

また合羽は紙絹さらしにてひとへに製し油をひきたる是を雨油衣あまがわといふ又木綿小倉の

類を紺びんらうじにし麻うらなどをつけ衿鎖くし袂そでの座のしやうぞくを細毛布こまふ羅紗にて風流に

製し雨天の時路次にて小袖をぬらすまじきために著用する也これをもめん合羽といふ遠路

の雨の用心にはならず漸一日路道十里ばかりをゆかん時の雨具には成もやせんはや二日路

には不用也とて是を十里合羽ともいふとぞ

〔近世事物考初編〕合羽

合羽は阿蘭陀より長崎へ商ひにくる蘭人の衣服に袖もなく裳廣き物有彼國人是をカツバと

いふ慶長二年初て此形をうつし紙にて張油をひきて雨を去のぐ具とせり今の坊主がつばは是

なり後に袖をも付羅紗木綿などにも拵へたり蘭語故にあて字を書り

〔一話一言二十九〕江戸風俗の事 服飾之部

諸役人万石以上以下

安永天明の初のころは略中 白紐のすげ笠黒き琥珀にて作れる合羽など皆人著せしなり略中

天明の末節儉の令一たび出て忽服飾を變じ略中 網代の笠をかぶり合羽はさいみ木綿などに